合格発表の日（山城高校の思い出）

山城32回　速　水　秀　和

「ハラハラ、ドキドキ」していた。

「不合格になることはない」とは思っていたが、「万が一」ということもある。「滑り止め」で私学を受験していないから絶対合格しないことには、あとがない。やはり、受けておけばよかった。後悔先に立たず。不安がつのる。

人生で初めての入試。合否決定の日、山城へ向かう途中自転車を漕ぎながら不吉なことばかりを考えていた。

当時の府立山城高校入試は京都府全体の定員数内に入れば合格と云う制度であり、（現在のように志望校を選択できる制度ではなかった。）合格すれば指定された府立高校への入学が決定する。私達、市立北野中学生は山城と決まっていたはずだ。

校内にはいり、慌ただしく自転車を止めると一目散に発表場所である体育館に向かった。発表時間が来るのが待ち遠しい。時間が来て扉が開き、演台に駆け寄る。受験番号を羅列した用紙の中から自身のものを探す。番号を追っていくごとに心拍が高くなっていく。ところどころ欠番がある。不吉な予感が再び

襲いかかる。もしなかったら・・・。

「あった。」「合格だ。」喜びとともに、虚脱感が全身を包んだ。

周囲では受験生らの歓声が聞こえていた。お互い喜び合った。そして、少し冷静になるともう一度、慎重に見間違いはないか確認することも忘れなかった。と、受験番号の書かれた用紙がふたつに分かれているのにその時気付いた。私の番号が書かれた用紙と、もうひとつには「以下の受験番号の方は嵯峨野高校へ入学する方です。」とあった。

耳をそばだてると一部の仲間が、誰彼は嵯峨野らしいと、噂話をしている。周りを見渡すと、私の親友であるS君が眼にとまった。当時交際していた彼女が隣りにいた。なんだか二人とも元気がない。落ちたのかなぁ。おそるおそる声をかけてみた。「試験には、二人とも合格したけど・・・。」要するに彼は山城、彼女は嵯峨野への入学。一緒に高校生活を送ることを楽しみに猛烈に受験勉強をしていただけに、この状況について悲痛な面持ちで立ち竦んでいた。ふたりにとっては無情な発表だった。

あれから、はや三十年近くが過ぎた。遠い昔日のことであるが、私自身にとっては、山城生として第一歩を記した何とも言えない喜びの記憶がある日。

とともに、青春のひとコマとして、今日に至っても「二人の戸惑う姿」が私の脳裏から消え去ることはない。